０４／１０／３１　　礼拝メッセージ　　土井義広　副牧師

主　　題：私たちが今、なすべきこと
聖書箇所：コリント人への手紙第一　７章１７－２４節

私たちはときどき、このようなことを考えます。「どのように生きることが私にとって正しいのだろう？どのように歩めば神さまが喜んでくださるのだろう？」と。今日の聖書のみことばはそのことを私たちに教えてくれている箇所です。

「:17ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになったときのままの状態で歩むべきです。私は、すべての教会で、このように指導しています。:18 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。:19 割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです。:20 おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。:21 奴隷の状態で召されたのなら、それを気にしてはいけません。しかし、もし自由の身になれるなら、むしろ自由になりなさい。:22 奴隷も、主にあって召された者は、主に属する自由人であり、同じように、自由人も、召された者はキリストに属する奴隷だからです。:23 あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となってはいけません。:24 兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態で、神の御前にいなさい。」

私たちが今すぐになすべきこととは？

この箇所をよく見ると、同じような教えが３度なされていることに気付きます。１７節**「神がおのおのをお召しになったときのままの状態で歩むべきです。」**、２０節**「おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。」**、２４節**「兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態で、神の御前にいなさい。」**と同じような表現があります。簡単に言うと「あなたは召された（＝救われた）ときの状態で留まっていなさい」ということです。つまり「むやみに環境を変えるべきではない」とパウロは教えているのです。

これはいったいどういうことでしょう？実は、多くのクリスチャンたちが、今日、私たちがこれから学ぼうとしていることを忘れてしまって、ある時に、神のみこころを損なってしまったり、形だけの信仰生活を送ってしまったりするのです。今日は、このＩコリント７：１７－２４を通して、聖書が私たちに教えていること、「私たちが今すぐになすべきこと」について、ごいっしょに学びましょう。

Ｉ．今の環境を感謝し続けること（１７節）

初めにパウロが教えるのは、今の自分の環境を感謝し続けなさいということです。17節に**「ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになったときのままの状態で歩むべきです。」**とありますが、ここを原語で見ると「おのおのに主が分け与えてくださった、おのおのを神が召し出してくださったそのように歩みなさい。」となっています。ここではっきりと教えられているのは、「神が①分け与えて、②召し出してくださった」ということと、「おのおの」（＝個人個人）が強調されているのです。「そのように歩みなさい」という表現からも分かる通り、これは救われた人たちの周りの環境について教えられているのです。

先週にも学んだことですが、神は一人一人に対して恵み（賜物）（Ｉコリント７：７）を分け与えてくださったのです。「恵み」というと私たちは自分から見て喜ばしいものだけを考えてしまいがちですが、パウロはそうは言いません。私たちが救われたときに置かれた状況や、今、私たちに与えられている環境はすべて、神がお考えになり、神が与えてくださったものだと教えるのです。だから、私たちはその状態を無理に変えようとしてはいけないのです。このように教えられているのは、当時のクリスチャンたちの中で、信仰をもったからといってすぐにそれまでの生活を捨ててしまうような人がいたからです。救われたのだから自分の思い描く最高の状態に自分を置こうとして、すぐに離婚しようとしたり（未信の配偶者との関係を絶つ、性的な接触の解消、俗的なことから離されるため）、禁欲主義の考えに惑わされて、一切の性的交渉を避けようとする、そのようなことが２０００年前のコリント教会で起こっていました。しかし、そのようなことは当時のコリント教会だけでなく、どこででも起こってしまう危険があるのです。だから、パウロも１７ｂ節に**「私は、すべての教会で、このように指導しています。」**と言うのです。

今もそのような考えが私たちクリスチャンの中にないでしょうか？例えば、夫婦のどちらかが信仰をもったとき、相手に一生懸命伝道しても救われないと、意気消沈して離婚しようとしたり、離婚されても良いように仕向けるとか、もちろん、実際にそこまですることはなくても、家庭生活の中で相手の意見を無視したり、配偶者のことや家庭をないがしろにしたり、考え方や価値観の違う家族をバカにしたり、そのようなことを時に見たり聞いたりしないでしょうか？また、信仰をもって今の仕事が聖書的に見て、それほど重要な意味のある仕事には思えないからといって、すぐに辞めてしまうなどということ

も…。２０００年前、クリスチャンに対する迫害は今の日本以上でした。多くの人にとって、クリスチャンたちは得体の知れない集まりに映ったのです。ある意味で今の新興宗教の人たちのように…。死んだ者が生き返ったとか、そのイエスが神であるとか、約束のメシヤであるとか、また、一般の人たちは聖餐式を見て、人間の血や肉を飲み食いするなんてと、そのような噂もあったのです。ユダヤ人の家系からクリスチャンが出ると、彼らは当然のように家から勘当されたのです。当時は、今では考えられないようなクリスチャンに対する迫害が強く、理解もない状況でした。ゆえに、信仰をもったときに、周りの環境を変えてしまいたい誘惑が強かったクリスチャンに対してパウロは「救われたときの状態でいなさい」と教えたのです。

なぜでしょう？１７節**「おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになった」**からです。別のことばで言い換えると「それぞれに違う私たちの周りの環境はすべて、主が与えてくださったものであり、そんな環境にいるあなたを主が選んで救ってくださった…」ということなのです。私たちがどのような環境にいようと、どのような仕事に就いていようと、どのような人と結婚関係にあろうと無関係です。神はそのようなことは百も承知であなたを選び、あなたを救い出してくださったのです。問題は私たちがそのことをどう考えるかということなのです。それを何とか変えようとして必死になるか、それとも神にすべてをお任せして、自分はその中で感謝することを求めるのか…。私たちはもう変えることのできない過去のことや、現在の状況を恥じて、急いでその状況から抜け出す、などという必要はないのです。なぜなら、Ｉコリント１：２６－２７に**「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんなさい。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。:27 しかし神は、知恵ある者をはずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者をはずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです。」**とあるように、神は私たちがどのような人間で、どんな環境にいるかということも、どのような弱さをもっているかということも、すべてご存じの上で、私を選び救い出してくださったのです。だからＩコリント４章で「誇ってはいけない」と教えられているのです。

私たちの周りの環境は、神がお許しになって、神がお考えになって与えられたものです。家族も健康も、才能も賜物も仕事も、そして、病気も…。皆さんはそのことを感謝しておられますか？みことばはそのように教えています。Ｉテサロニケ５：１６－１８**「いつも喜んでいなさい。:17 絶えず祈りなさい。:18 すべての事について、<u>感謝</u>しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに<u>望んで</u>おられることです。」**と。簡単にできることではないと言われますか？「簡単ではない」ということを言い訳にして実践しようとしないのではありませんか？これは神からの命令なのです。あなたを愛し、あなたのことを心配し、あなたを救うためにご自分のいのちまで捨ててくださった神のことばなのです。あなたにできないことを神は命令されると思いますか？あなたが神を信頼して神を愛するがゆえにやろうとしておられるのを見て、神が助けてくださらないと思いますか？

私たちに必要なことは、自分が喜べるような環境が整えられることではなく、たとえ、環境がどのようであったとしても、とても満足できるような環境ではなかったとしても、その中にあって喜び続けることなのです。残念ながら、当時のコリント教会の何人かは、自分の周りの環境を無理矢理に変えようとしたのです。その一つが、先週見た結婚のことです。それは神のみこころではありません。神は敢えて、皆さんに今の環境をお与えになって、神のご計画をなしてくださるのです。

<u>Ⅱ．心から神の命令を守ること（１８－２０節）</u>

１８－１９節**「:18 召されたとき割礼を受けていたのなら、その跡をなくしてはいけません。また、召されたとき割礼を受けていなかったのなら、割礼を受けてはいけません。:19 割礼は取るに足らぬこと、無割礼も取るに足らぬことです。重要なのは神の命令を守ることです。」**、ここでパウロが話していることは「割礼」のことです。割礼とは旧約聖書で教えられている儀式のことです（創世記１７章、出エジプト１２章、レビ記１２章）。男の子が生まれて８日後に性器の皮の一部を切り取るのです。当時のユダヤ人たちはそれを厳格に守り行なっていたのです。なぜパウロはそれを**「取るに足らぬこと」**などと言うのでしょう？

そもそも、なぜ割礼が与えられたのでしょう？神はユダヤ人たちに「生まれて８日目に受けさせよ」とお命じになられました。「無割礼の者は民から断ち切られなければならない」とも教えられました。割礼は神がユダヤ人に対して、彼らを増やし、約束の地を与える（創世記１７：１－１４）という契約のしるしでした。しかし、神がユダヤ人たちに最も伝えたかったことは、単に、自分たちがアブラハムの子孫であるということを覚えさせるためではなく、アブラハムの全き信仰を彼らが覚えて、それに倣うためだったのです。心から神に服従することです。神が真に願っておられたのは、肉体の割礼などではなく心の割礼であったのです。ローマ２：２８－２９に**「外見上のユダヤ人がユダヤ人なのではなく、外見上のからだの割礼が割礼なのではありません。:29 かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人であり、文字ではなく、御霊による、<u>心の割礼</u>こそ割礼です。その誉れは、人からではなく、神から来るものです。」**とあるとおりです。このことは旧約聖書にも教えられているのです。レビ記２６：４１**「そのとき、彼らの<u>無割礼の心</u>**

はへりくだり、」、申命記１０：１６**「あなたがたは、心の包皮を切り捨てなさい。もううなじのこわい者であってはならない。」**、申命記３０：６**「あなたの神、主は、あなたの心と、あなたの子孫の心を包む皮を切り捨てて、あなたが心を尽くし、精神を尽くし、あなたの神、主を愛し、それであなたが生きるようにされる。」**、エレミヤ４：４**「ユダの人とエルサレムの住民よ。主のために割礼を受け、心の包皮を取り除け。さもないと、あなたがたの悪い行ないのため、わたしの憤りが火のように出て燃え上がり、消す者もいないだろう。」**、エレミヤ９：２６**「エジプト、ユダ、エドム、アモン人、モアブ、および荒野の住人でこめかみを刈り上げているすべての者を罰する。すべての国々は無割礼であり、イスラエルの全家も心に割礼を受けていないからだ。」**、エゼキエル書４４：７**「あなたがたは、心にも肉体にも割礼を受けていない外国人を連れて来て、わたしの聖所におらせ、わたしの宮を汚した。あなたがたは、わたしのパンと脂肪と血とをささげたが、あなたがたのすべての忌みきらうべきわざによって、わたしとの契約を破った。」**

しかし、実際はどうだったのでしょう？ユダヤ人はアブラハムの信仰に倣うどころか、自分たちが立派でもないのに、さも立派であるかのように誇り始めたのです。「自分たちは選民であり、真の神を知っている」と。そして、神の律法を本当は守れていないのに実践できているとしました。大きな間違いです。自分たちの血統や自分たちの行ないが神の前に価値のあるものであり、神がそれを認めてくださっていると考えていたのです。大切なのは、まず「私たちの心」です。完全に正しく聖い神の前に、私たち人間がいかに醜く、罪深いか、愚かな者であるかを私たちが気付くために、神は律法をお与えになったのです。だから、詩篇５１篇にはこのように書かれています。**「:16たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。:17 神へのいけにえは、砕かれたたましい。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」**と。救われた私たちにはもう「養育係」は必要ないのです（ガラテヤ３：２４－２５**「こうして、律法は私たちをキリストへ導くための私たちの養育係となりました。私たちが信仰によって義と認められるためなのです。:25 しかし、信仰が現われた以上、私たちはもはや養育係の下にはいません。」**）。私たちは気付かなければいけません。自分の行ないでは自分を救うことはできない、ただ、イエスの十字架だけが、私たちの罪を完全に赦すことができる唯一の方法であることを。そして、そのことを知った信仰者は、神に心からの感謝をささげるがゆえに、神の命令に従うのです。大切なのは外見（割礼や環境）を変えることではなく、その中にあって、心から神の命令に従って行くことなのです。

当時のコリント教会にあった問題は、多くの者が自分たちのことばかり考え、それも外面的なこと、他の人が自分をどのように見ているか、少しでも高く評価されたい…、とそんなことばかり考えていたのです。彼らは救いだけでは満足せず、どうすればより良い宗教的な外見を得ることができるか、より自分が納得できるような状況になるか、ということに思いを馳せ、最も肝心な自分の内側の「心を変える」ということをおろそかにしてしまっていたのです。ですから、パウロは**「おのおの自分が召されたときの状態にとどまっていなさい。」**（２０節）と教え、外見ばかりにこだわるクリスチャンに対して戒めるのです。あなたは何を優先しているのか？どこを見ているのか？と。

Ⅲ．人と自分を比べないで、神にだけ仕える（２１－２４節）

他の人が自分をどのように見ているか、また、自分が少しでも他の人よりも優位に立ちたいと考えていたコリント教会の人たちが、割礼のことを気にしていたのなら、自分たちの身分（奴隷）を気にしないはずがありません。その当時、ローマ世界には多くの奴隷たちがいました。彼らの中には「自分たちは主にあって罪から解放されて自由の身となったはずなのに、実際の自分は奴隷として主人に仕えなければならない…、いったいこれはどういうことだろう…。」とこのように考える人たちもいました。しかし、ここでもパウロの勧めは同じです。２４節に**「兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態で、神の御前にいなさい。」**とあるように、また、１７節にも**「ただ、おのおのが、主からいただいた分に応じ、また神がおのおのをお召しになったときのままの状態で歩むべきです。」**とあるように、どのような人であっても、主がその人を救い出してくださって、その状況をお許しになっておられるのです。

またその主は、私たちを罪から救うために、その尊い血潮を流され、いのちを捨ててくださいました。２３節に**「あなたがたは、代価をもって買われたのです。人間の奴隷となってはいけません。」**とあるように、それは、罪の奴隷であった私たちを買い戻すために主が支払われた「身代金」でした。私たちは、奴隷であった自分の代価を払われて神の所有物とされたのです。ですから、大切なことは、外的な状況を変えたり、今の自分の状態を卑下したりすることではなく、キリストのものとして生きることです。置かれた立場と状況において、キリストに仕えて生きることです。当時のコリント教会の人たちはこの大切なことを忘れて、周りの人の評価ばかりに関心をもち、他人と自分を比べて常に自分が優位に立ちたいと虚栄の奴隷になっていたのです。神は、造り主である神に逆らい続け、何の価値もない私たちを御国へと招き入れてくださいました。それは、私たちを用いて、さらに多くの人々を救い、神の御栄を現わすためでした。私たちに必要なことはこの目的を唯一の目的として歩むことです。２３節に**「人間の奴隷**

となってはいけません。」とあるように、人の考えに縛られたり他人に振り回されてしまってはいけないのです。私たちはそのような状況から解放されたのです。ですから、神だけを見て神に心からの従順を持って仕えてゆくことが必要なのです。それは、奴隷であっても自由人であっても、会社員でも主婦でもまったく関係のないことです。

２４節には**「兄弟たち。おのおの召されたときのままの状態で、<u>神の御前にいなさい</u>。」**とあります。「神のそばにいなさい」という意味です。今私たちがしっかり覚えるべきことは、何が神のみこころであって、果たして、神が今の私を喜んでくださっているかどうかということです。私たちはともすれば神から目を逸らして周りの環境や問題に目を留めてしまい、神がすべてを導いておられることを忘れてしまいます。信仰生活においても表面的なもので満足してしまって、一番大切な心の動機を忘れてしまいます。そして、他の人を羨んだり、憎んだり、ひがんだり、自分をさげすんだりしてしまうのです。大切なことは神がどのようなお方かをはっきり覚えることです。

①神は私たちのすべてを導き、すべてをご存じの上で、なお私たちを愛してくださっている。
②神は常に私たちの内側、心を見ておられる。
③神は最高のことを私たちになしてくださっている。